

イタリアの地理教科書にみる 日本イメージの変遷

上野隆生 *UENO Takao*

——はじめに

1 ——イタリアの学校制度と教科書

2 ——1945年以前の地理教科書にみる日本イメージ

3 ——1945年から1960年代前半にかけての地理教科書にみる日本イメージ

——おわりに

【Summary】 This article deals with the Italian School Textbooks, especially those of geography, published from 1920's to the first half of 1960's. My focus falls upon the Italian images of Japan —how they described Japan and things Japanese—and its transition.

Naturally in the field of culture or *belle arte* important exchanges between Japan and Italy have been occurred since the end of Edo period. But the study of public images between the two nations has been less exhausted than we expect in the domain of modern Japanese history. This negligence seemed more queer in considering the intimate relations between the two countries as fascist powers in the late 1930's and in the first half of the 1940's.

After the defeat of the fascist powers, democracy and economy appeared to have become the main interests of nations instead of the arrogant aggression and expanding the colonial-empire. So did it even in the ex-fascist nations. Then, what of the images of Japan in Italy?

Even though my analysis is circumscribed by lack of comprehensive materials, for the purpose of gaining a better understanding of the Italian images of Japan for nearly fifty years in the midst of 20th century, the following might be a conclusion.

First and foremost, we often read in the textbooks that Japan made such a successful take-out both in the economical and in the political dimensions. It was so surprising that almost every textbook, no matter when it was published, mentioned on that point. Not only in the pre-WWII period but also in the post-WWII period, it is clear that they are astonished at the speed of development of Japan.

Secondly, they tried to grasp the reason of such rapid development. The reason of this rapidity always centered on the shrewd capability of Japanese people to imitate European civilization. At the same time, often mentioned is the fact that Japan lacked enough space, food and materials to nurture the Japanese people. There comes the striking difference between pre- and post-WWII. Before the WWII, they regarded this lack as a reason that Japan conquered Korea, China, and Southeast Asia. In other words, it was well “justified” for Japan to annex these area. After the WWII, on the other hand, they come to think that over-population and material shortage compelled Japanese industry to become more labor-intensive and effective, which has been the essential characteristic of Japanese industries. Therefore Japanese products can be competitive everywhere in the world.

Thirdly, with a feeling of marvels, they introduced Japanese ways of life, beautiful sceneries such as Inland Sea, and Japanese culture. It has been more mentioned in detail than we had ex-

pected. A particular emphasis is laid on the contrast between the highly modernized industrial apparatus and the traditional way of life.

In a nutshell, reviewing the Italian school textbooks of geography, an ambivalent image has existed about Japan, that is, wonder and menace. When it comes to the rapidity of Westernization, a feeling of wonder cast a long shadow of the images of Japan in Italy. But at once looking from the viewpoint of geopolitics or the rapidity of Japanese expansion into Asia and the Pacific, a feeling of menace emerged into the images of Japan. This ambivalence seems to have created the prototype of the images of Japan in Italy.

——はじめに

「世界第二位の経済大国も、普通の民主主義国家になった。」¹⁾ イタリアの代表紙の一つである『ラ・レプブリカ』はこのように書き出して、自民党から民主党への政権交代と鳩山内閣成立とを報じた。ここに見られるような「経済大国」や「民主主義国家」といったイメージは、いつ頃から日本に対して生まれてきたのであろうか。

本稿は、イタリアの中等教育における地理教科書を素材として、日本イメージの変遷を探ろうとするものである。

イタリアはドイツおよび日本とほぼ同時期に国民国家として統一を果たした。後発の資本主義国および帝国主義国という点では、これら三か国は共通しているといえよう。さらに、20世紀前半においてこれら三か国は、それぞれファシズム・ナチズム・天皇制軍国主義という差異はあれ、全体主義的傾向を極端にまで深めたという点でも共通している。ドイツやイタリアにおける日本イメージが如何なるものであったのかを把握することは、日本の近代を比較史的に検討する上でも意味があるだろう²⁾。

その素材として教科書を取り上げるのは、時系列で一定程度追跡可能であること、教育課程における読み物であるため、その後の

人々のイメージ形成に一定の影響があると考えられるためである。ただし、付言しておかなければならないのは、イタリアの教科書収集状況である。イタリアにおいては、ドイツのような体系的な教科書図書館³⁾は見当たらない。唯一それに近い存在がフィレンツェにある「国立学校自治発展機構」(Agenzia Nazionale per lo Sviluppo dell'Autonomia Scolastica)である。同機構の起源は1925年に遡る。国立教育展示場として設立されたが、1939年には「国立教育博物館」と改められた。さらに1950年には「研究と革新の教育センター」、そして2001年には政府の組織改編で「教育の革新と調査研究のための国立文書館」(略称INDIRE)と改称されてきた(以下、本稿ではINDIREの略称で記すこととする)⁴⁾。

また、イタリアにおける最初の学校博物館は、1995年にボルツァーノ(ドイツ語名ボーツェン)に設立された⁵⁾。しかし、教科書の収集整理という点では、規模においてもまだささやかな域を出ず、体系的収集という状況からは程遠い上に、収集資料の多くは未整理でもある⁶⁾。

このような資料状況を踏まえて、本稿ではINDIREに所蔵されている地理教科書を中心に、とりあえず1960年代前半までについての分析を進めることとする。その理由は、管見の限りではイタリア国内で最も教科書が揃っているのがINDIREであることによる。もっ

とも、それにも拘わらず、1925年以前の教科書はほとんど収蔵されていないこと、ならびに整理分類が本稿で取り上げた史料も含めて完全にはなされていないこと、収集が体系的ではないこと、などの限界はある。また、専ら紙幅の関係で、歴史教科書の分析は別の機会に譲らざるを得ないことも予め付言しておく。このような史料状況から、種々の学校種を系統的に追跡することはできず、その意味では、本稿は最終的な分析というよりも、一つの試論に近いものである。なお、本稿のような観点からの分析は日本語の文献ではこれまでのところほとんど見られない。そのため、以下の本論においては実際の叙述例の紹介にも留意したい。

1——イタリアの学校制度と教科書

本節ではまず、イタリアの学校制度について概観しておこう。

最近ではPISAの結果に先進国は一喜一憂して、「教育改革」に血道をあげている観がある。イタリアも種々の「改革」を試みている点では例外ではない。特に20世紀から21世

紀への世紀転換期を挟んで、中道左派と中道右派との政権交代もあり、相次ぐ「画期的改革」によって、イタリア教育はめまぐるしく変転した⁷⁾。その中で、教育相 Letizia Moratti によって提起された改革案が2003年3月28日に議会を通過、それ以前の学年再編案などを廃止し、新たな改革に向かうこととなった。その後中道左派政権が政権に復帰したが、この Moratti 改革を廃止することはせず、これに基づいて学校制度の再構築を進めているといえよう。Moratti 改革は基本的にこれまでの基本的な枠組みを変えずに、幼稚園・小学校・中学校・高校(リチェ)の教育制度と職業教育とを整序する類のものといわれている⁸⁾。Moratti 改革による現状の学校制度は、概ね表1のようになっている。

このうち、義務教育は小学校から第二課程(＝中等教育課程)の最初の2年間までとされているが、現状は必ずしもそこまで及んでおらず中学校第一段階までに留まっている場合が多いようである。また、学校数など現在の概要は政府統計(2007-2008年度の公立学校数)によれば表2の通りである。

イタリアの教育制度の特色を考える上で重

表1

段階	学校種	入学年齢、就学期間など
幼稚園		3歳～6歳
第一課程	小学校	5年間
	中学校第一段階	3年間
第二課程	リチェシステム	5年間、8種類(古典、科学、言語、芸術、経済、技術、人文科学、音楽・舞踊)に区分
	職業形成教育システム	4年間(企業での実習を可能とする)第5学年は、大学入学のためにのみ必要

出典：Marcello Dei, *La scuola in Italia*, Società editrice il Mulino: Bologna, 1997. 3' edizione aggiornata 2007, p.21.

表2

	幼稚園	小学校	中学校	高等学校	総数
校数(校)	13,629	16,018	7,104	5,128	41,879
児童・生徒数(人)	975,757	2,579,938	1,625,651	2,570,010	7,751,356
学級数	42,370	138,056	77,511	119,051	376,988
教員数(非常勤含む)(人)	83,586	245,727	163,159	230,881	723,353

出典：La Scuola Statale: sintesi dei dati anno scolastico 2007/2008, Ministero dell'Istruzione, dell'Università e della Ricerca, giugno 2008, p.IV.

要なのは、イタリア王国の成立（1861年）である。統一の中核となったサヴォア家の学校制度は、1859年にCasati法により体系化され、統一後その制度が徐々にイタリア全土に広まった。その制度の根幹は、ブルジョアジーや支配階級の再生産の役割を担う大学での勉学に備えた部門と、プチブルの教育要求を満たす、技術的な中間幹部・下級官吏やサラリーマンの形成が委ねられた部門との二元論的性格にあった。具体的には、前者を体現するものとしてginnasio（2年制の後期中等学校）とliceo（リチェ、高等学校）が設置され、後者のためには技術専門学校が置かれた。このような二元論的傾向は、ムッソリーニ政権下の1923年に公教育大臣Giovanni Gentileによって強化された。このGentile改革は、イタリアの学校制度を再編成したものと評され、今日までその遺産は存続しているといわれている。そしてこの結果、古典的な階級教育（古典リチェと理科リチェ）を技術教育や職業教育から区別することとなったのである⁹⁾。

義務教育年限をどうするかという点での変更や試みはあるが、制度の構造的枠組みは基本的に不変であるといえよう。現在のところ就学年限については、3+5+3+5（就学前3年間+小学校5年間+下級中等学校3年間+上級中等学校5年間）という枠組みであり、現在施行されている学校制度における中等教育の学校種としては、5年間の中高等学校第二課程に「古典リチェ」・「理科リチェ」・「社会心理教育リチェ」・「技術学校」・「職業学校」が含まれ、「芸術教育」として「美術学校」・「芸術リチェ」（4年生から芸術大学へ進学）・「音楽学校」・「舞踊学校」・「国立演劇学校」がある¹⁰⁾。なお、小学校教員養成のために設置された教員養成高等専門学校（istituto magistrale）

はもともとは4年課程であったが、他のタイプの後期中等教育に適合させるために、5年課程になった。そして1994年には社会心理教育リチェに改称統合された¹¹⁾。

イタリアの教育については、不識字率の高さと学士号取得者の多さという跛行的な特色がかねてから指摘されている¹²⁾。そもそも、中央集権的色彩の強い日本的な感覚でイタリアやドイツの学校教育制度を捉えること自体が適切ではない¹³⁾。ドイツの場合以上にイタリアは地方あるいは学校の自主性が強く¹⁴⁾、教科書もその意味ではさまざまである。そのような多様性を前提として、次節以下では具体的に教科書記述を検討していく。

2——1945年以前の地理教科書にみる日本イメージ

本節では、1945年以前の地理教科書を通じてどのような日本像が描かれているのかを検討する。概していえば、記述はイタリアないしヨーロッパ地域が中心であり、非ヨーロッパ地域には及んでいない場合もある。その意味では、日本関連記述は必ずしも豊富ではない。

管見の限りでは、INDIRE所蔵で日本関連記述のある最も古い地理教科書は、1920年に出版されたものである。日本に関する叙述は以下のように始まっている。

日本帝国は、全部で70万平方キロメートルの範囲に及んでいる。そこには、7500万人の住民が暮らしている。したがって、面積でも人口でも、イタリアのほぼ倍である。日本帝国は、固有の日本と、エゾ、キリル、琉球（38万平方キロメートル、5400万の人口、一平方キロメートル当たり142人）

そして植民地からなっている。固有の日本は、すべて、深い入り江で分断された島々で形成されている¹⁵⁾。[ゴシックは原文ではブロック体、イタリックマ]

地理教科書全般に共通することであるが、面積・人口・人口密度については、具体的数字を紹介している。ここで、「固有の日本」という表現で意味しているのが、本州・四国・九州である点は注目される。続けて、日本が「海洋国家」であると指摘した上で、「アジアに関しては、イギリスがヨーロッパに対して占めているのと似たような位置を占めている」とも記している¹⁶⁾。さらに、イギリスと類似しているのは商工業の発達においても同様である、と指摘しているが、「日本は何よりもまず農業国」で、全体の面積の半分が耕地化されていること、米・果物・茶・たばこの栽培が広く行われていること、家畜の飼育は少ないが蚕はたいへん広く飼育されていること、漁業も盛んで漁獲量も豊富であること、などが次々と述べられている¹⁷⁾。

工業においては、日本は「今やヨーロッパの工業大国に変化した」と述べ、次のように記述している。

日本は、極東市場においてだけでなく、世界中の市場においても、ヨーロッパに競争を仕掛けている。日本の商業能力は、低廉な労働力と、11000キロメートルの鉄道と200万トンの商船によって容易に助けられている。日本は、そのような商業能力を利用しているのである¹⁸⁾。

日本の急速な発展がヨーロッパ化によるものであり、労働力の安さが日本の国際競争力を

支えている点も明確に把握されている。

他書でもしばしば取り上げられることになっているのが、中国と日本との対比である。「黄色人種」という点では同じだが、「知的」にも「肉体的」にも両者は異なるとして、「日本人は中国人とは異なって、兵役をよく果たすことができ、西洋文明の所産のすべてを容易に吸収してしまう」と述べられる¹⁹⁾。政治体制については、「かつては封建体制で統治されていたが、今では、上院と人民により選出された下院とを有する、世襲の立憲君主制である」[ゴシック・イタリックマ]と述べられている²⁰⁾。

主要都市として、首都の東京の他、京都・大阪・横浜・神戸・長崎・函館が紹介されている。さらに、「日本の植民地」は「サハリン島と台湾、旅順、そして朝鮮である」[イタリックマ]と記され、面積・人口に加えて産業・資源などが記されている。このうち朝鮮に関する記述を紹介しておこう。「朝鮮は、山がちで丘陵地の多い国であるが、大部分は肥沃である。」[ゴシックは原文ではブロック体]こう述べた後に、「住民は、中国人と同系であるが、固有の言語と風俗習慣とを持っている。朝鮮は、日本の植民地化に適していて、日本人はほぼ全商工業の支配権を握っている」と記している²¹⁾。朝鮮が「日本の植民地化に適してい」という指摘の根拠は不明だが、1920年代において「日本人はほぼ全商工業の支配権を握っている」という指摘がなされていることが重要である。

出版年は不明だが、掲載されている写真などからほぼ同時期のものではないかと思われる上級中等学校用教科書でも、「朝鮮を併合」した日本が約70万km²の面積と、約8000万人の人口を有している点を記している。そして、日本は、中国同様にヨーロッパ諸国に対して

門戸を閉ざしたままであったが、

一旦西洋文明と接触すると、経済面でも機械化の面でも大きく進歩しながら、直ちに西洋文明を自分のものにすることができた。またその一方で、日本はいかなる犠牲もいとわない統制された人民を有し、宿命論的で戦闘好きの心性を維持している。皇帝（ミカド）は、ほとんど神のような崇拜を得ている。1895年に日本は中国と戦い、台湾をもぎ取り、朝鮮王国を廃止して、日本の一州とした²²⁾。

このように述べて、「人口は非常に増えて、いわゆる黄禍論を恐れる白人によって妨害されているにもかかわらず、太平洋の全沿岸に広がり」、「合衆国と太平洋の覇権を争っている」と指摘する²³⁾。

1920年代中葉の中学校用教科書でも、面積・人口・領域などについてはほぼ同様の記述があるが、それに加えて、都市景観について次のように述べている。

日本では、町はそれぞれ固有の様相を有していて、地震の頻発と木材の豊富さのために、木造で低い家を建てるのが好まれている。しかし、ヨーロッパ文明の流入とともに、日ごとに、かなり多くの都市で、石造りの建物の建築も導入されている。日本は、数十年のうちに、その文明に特別な重要性を付与するヨーロッパの科学を同化する能力を備えたのである²⁴⁾。

建造物の変容からヨーロッパ文明を受容する速度を指摘している点は興味深い。

1930年代に入ると、アジアにおける日本の

重要性を一層具体的に強調した記述が見られる。たとえば職業学校用の教科書では、次のように指摘されている。

日本は、絹の輸出国の中で第一位を占めている。日本は、アジアでの最強国、最先進国で、最も秩序だった国である。日本の工業製品は、他の欧米諸国の製品に対して競争を仕掛けていて、その工業は全世界の大部分との競争に持ちこたえている。日本の海軍は、非常に強力である。商業は、多くの鉄道網と、大変出入りの多い、数えきれないほどの港湾とで非常に活発である。それらの港湾は、船舶が頻繁に往来する航路によって全世界の国々の港と接続している²⁵⁾。

日本の産業面の動向と輸送・交通網の拡大、ひいては日本と欧米との競争は、この時期の関心の焦点であった。

やはり職業学校向けの他の教科書でも、日本の「帝国領土内（九州、エゾ）の石炭生産」はその工業生産に見合うだけの十分な供給能力はないとして、次のように記している。

注目すべきは従属国（サハリン、100万トン以上、朝鮮、150万トン、台湾150万トン）と同盟者（満州）、そして最近（1937年11月）占領された中国北方の行政区画（河北省・山東省など、約2000万トン）の石炭生産である。そこでは、広大で豊富な炭層の開発がようやく緒に着いたばかりである²⁶⁾。[イタリクマ]

簡潔な叙述だが、植民地からの資源によって日本の工業生産が賄われている点が明確に指

摘されている。また、日本は

ヨーロッパの生産方式と商業方式を受け入れることで、数十年前から新たな生活に再覚醒し、見事な商船隊を有している。その商船隊は、世界の3分の1に当たる(421万6000トン)。日本の船舶は、極東と太平洋での商業で優位を占めているが、今や他のすべての海でも巡りあうに至っている²⁷⁾。

こう述べて、海上輸送でも日本が台頭している点を指摘している。

以前には見られなかったのが商業航空路に関する記述である。該当する件を引用しよう。

日本の商業航空の発達は、最近のことである。主要路線は、東京—名古屋—大阪—福岡(九州)—京城(朝鮮)—大連(遼東)で、全長2130kmである。大連でこの路線は、ハルビンを中心とする満州の航空路線と接続する。そこから航空路線は放射状にあらゆる方向に広がっている。基幹となる満州路線は、大連—奉天—新京—ハルビン—チチハル—満州里(1750km)である。そこからかなり多くの二次路線が出ている(奉天—ジョホール) 1937年に日中[合弁]会社の一つがジョホールを中国北部の航空路線と一緒にした。そこでは、かなり多くの路線が日中[合弁]会社によって経営されている。中国での日本による新たな軍事干渉(1938年)が、確実に中国での日本の航空路線の発達を手助けするだろう²⁸⁾ [ゴシック・イタリックマ]

日中戦争全面化や南京大虐殺を日本が惹き起こしている時期に、そのような日本の侵略が中国大陆における日本の商業航空路線拡充に寄与するという見解を示している点は注目すべきであろう。すでに日独伊防共協定も締結された時点であり、イタリアもエチオピアを侵略した時期でもあるため、このような見解が表わされているのかもしれない。

ファシズム期の日伊関係はそれ自体で重要なテーマであるが、相互のイメージがいかなるものであったのかはほとんど検討されてこなかったといえよう。特に、共産主義を媒介としてどのようなイメージが形成されたのかは興味深い検討課題である。そのテーマに関しては、少ないながらも学校の絵画工作を素材とした検討がイタリアでは行われ始めている。そのような素材の一例が、日独伊防共協定締結当日の1937年11月6日、バリッラ少年団員であった小学生のゲスアルト・エルミーニが自分のノートに記したメモである。そこには「反共産主義者戦線ために、ローマで伊独日の協定が調印される」という短い一節とともにパステル画のデッサンが描かれていた。そのデッサンは、戦闘的な共産主義者を表わし、その頭上には威嚇的に伊独日の短剣が迫っている、というものであった²⁹⁾。また同じく、13歳の少女マリア・アントニエッタ・チェッレータは、「三国協定の刃によって突き通される共産主義の怪物」を描いている³⁰⁾。ムッソリーニ政権下のイタリアにおける共産主義者のイメージがどのように形成されていたかが窺われる。

実は、日独伊防共協定締結を記念するかのよう、日本側からの働きかけによって、デッサン・作品品の交換を通じた児童生徒間の交流が行われた。そのスポンサー役を果たし

たのが森永製菓で、作品の一部はINDIREに保存されている。そして、イタリア側でも日本についての調査（リチェルカ、ricerca）を生徒が行った。そのうち、ある技術商業学校生徒エンリコの作品が完全な形で保存されている³¹⁾。リチェルカはイタリアの伝統的な教育手法で、作業課題を生徒が調査研究し、それを文章にまとめるものである。エンリコのリチェルカは、おそらく当時のムッソリーニ政権下で刊行された百科事典類を中心にまとめたものと推測されるが、写真も多く掲載している他、すべて手書きながらかなりの分量に上る。デッサン画などの非文字史料を含めた素材を通したファシズム期の相互イメージの検討もやはり重要なテーマであるが、その分析は別の機会に譲ることとする。ここでは、如上の児童・生徒らのイメージと教科書記述とは、相互に関連している可能性があることを指摘するに止めておきたい。

日本とイタリアが同盟関係を強めつつある時期の1939年に出された中学校用教科書には、日本の軍事的性格について一層明確な記述が見られる。すなわち、

今日、日本は、アジアにおける最強国で、最も文明的で豊かな国であり、欧米の最重要国と肩を並べ、世界列強の一員に数えられるほどになっている³²⁾。[ゴシックマ]

という書き出しで始まり、日本の急速な西洋化に対する驚きと日本人の特性とが以下のように記されている。

日本人は、モンゴル人に由来する。日本人は、知的で、慎重深く、非常に勇敢である。19世紀後半まで、日本は東洋文明

の国で、ヨーロッパ人には完全に閉ざされていた。だが、その港をアメリカやイギリスに開いた後、我々の文明が大いに優越していることに気づいて、1868年の革命で、日本人はわずかな年月のうちに、政治生活でも、市民生活でも、経済でも、大胆に我々の手本を身につけた。そして我々に追いつき、匹敵することに成功した。1894-1895年に、日本は極東で中国との戦争に勝利した。1904-1905年のロシアとの悲慘で幸運な戦争で、日本は見事な軍事的・政治的性質を明示した。また、現在、中国で文明の名で戦われている長く厳しい戦争で、日本は、アジアと世界において、日本の若く力強い人民の正当な権利は、我々と同様に、市場と資源を必要とするのだと再び主張し始めた³³⁾。
[ゴシックマ]

この件は、「新秩序」を模索するファシズム国家どうしの相互認識を示しているといえよう。産業についても日本の産物を詳しく列挙した上で、伝統的産業は「絹、陶器、紙、漆製品、青銅製品など」であったが「しばらく前から、商工業でも大きく発達している」[ゴシックマ]と強調している。具体的には、

日本の文明の発達、水力、労働力の豊富さと低廉さは、冶金、機械、綿織物、絹織物などの近代的大工業の源を与え、はずみをつけた。特に綿織物や絹織物は、戦中に大きく躍進し、今日では欧米の工業に非常に強力な競争を仕掛けている³⁴⁾。
[ゴシックマ]

なお、イタリアと日本との貿易は「今のところ

ろ、わずかな品物に限られている」が、両国の「政治社会、経済関係は量的にも質的にも重要になっている」として³⁵⁾、日伊関係に言及している点は注目してよいだろう。

このような「新秩序」に関わる観点は、当時枢軸国で流行した地政学的な色彩とも相まっている。「政治地理は、人文地理学の最近の一領域で、人間社会の地理と定義することができる。すなわち、政治地理の主要な研究は、人間組織で最も複雑であり、完璧であるタイプを象徴する、国家である。」³⁶⁾ こう記するのは、1940年に出版されたりチェおよび教員養成学校用の教科書である。「*国家は、共同体の目標と利益との実現と保護のために組織された最も広範で複雑な人間組織であると定義できる。国家の主要要素は、領域と住民である*」[イタリクママ] ³⁷⁾ という国家観は、国家の存在を至上のものとする伝統的なWestern State Systemの考え方である。

そして、「地球上の政治的光景」という項目で日本に関して以下のように述べている。

世界のこの地域[アジアを指す、引用者注]での政治的進化は、日本人の業績のおかげで非常に急速に進んだ。日本人は、日本の利害と一致し調和させるようなやり方で、多かれ少なかれ決定的に西洋の影響を排除しながら、中国とその属領の最終的な枠組みを予め決めていた。西洋は、極東での最近の政治的軍事的出来事によって、その威信にとって非常に厳しい一撃を受けたのである³⁸⁾。

極東において、日本が西洋各国を排除しながら、かつ強引なやり方で「新秩序」形成を進めていることがわかる。同じ枢軸国のイタリ

アからもこう見られていたのである。

職業技術学校用の1943年版教科書では、日本は「数十年で」「最先進国の一つ」「最も権威ある国の一つ」になり、「南アジアや東アジアの独立国のチャンピオン」になったと述べている。その理由として、「ヨーロッパ文明を同化した」のは日本人だけであることを指摘する。しかしそれにも拘わらず、「この同化は、ヨーロッパの人民のそれとはかけ離れたままである日本人の精神や精神構造を変えるものではなかった」と述べ³⁹⁾、本質的異和感を隠していない。同時に、単に西洋文明の受容によって工業の近代化が進んだのではなく、背景要因としての過剰労働力の存在にも目を向けている。そして最後に次のように結んでいる。

人口が大幅にかつ継続的に増加していることは、東アジアや南アジアの他の国々にかんがりの移民を送り出すことを必要とさせている。これらの地域は、日本人が啓発し、組織化するものである⁴⁰⁾。[ゴシクママ]

人口増加とその圧力が移民と支配を正当化する口実として使われているのである。

3——1945年から1960年代前半にかけての地理教科書にみる日本イメージ

INDIREにある第二次世界大戦後の教科書としては、1947年に出版された工業学校の入門用教科書が最初である。記述量も少なく、面積・人口を記した上で、イギリス同様に日本が「島々から構成されている」こと、「最近の戦争に敗れ、日本は、その植民地（朝鮮、

台湾、マリアナ、カロリンなどなど)のすべてを失った」ことが記されている⁴¹⁾。

これに対して、1949年版の中学校用教科書は、かなりの記述量がある。まず、

1905年、ロシアとの戦争の後に、日本はサハリンの半分と旅順を占有し、朝鮮半島の主権を武力で奪取した。連合軍に敗北して、日本はそれまでのアジア大陸での征服地(朝鮮、旅順)、サハリン島、台湾、そしてオセアニアのマリアナ諸島、カロリン諸島、パラウ群島を放棄しなければならなかった⁴²⁾。[イタリクマ]

さらに、

1941年にはだまし討ち的にアメリカ、イギリス、オランダ、フランスを攻撃した。最初は大成功であったが、敗北の連続で降伏せざるを得なくなり、現在ではアメリカ軍に占領されている⁴³⁾。

このように述べて、戦前と戦後の日本の植民地獲得と放棄の状況を簡潔に記している。しかし、政治に関する記述では、

日本政府は、立憲君主制で、上院(一部は天皇の指名で、一部は財産税と貴族の特別な区分からの代表)と、4年ごとに満20歳以上の市民により選ばれる446人の代表者の院を持つ⁴⁴⁾。[イタリクマ]

とあり、明治憲法体制下の状況をそのまま記している部分もある⁴⁵⁾。

また、「日本人は、大変良い性質、洗練された教育、生き活きた芸術的感情を持って

おり、勇敢で、死を恐れない、熱烈な愛国者である」というように⁴⁶⁾、戦前から形成されているイメージを踏襲している記述もある。

産業に関する記述も総括的に詳しくなされている。農業の労働集約的特徴を指摘した上で、「農業生産物は日本の食料供給には十分ではない」とし、鯨を含む漁獲高の多さと魚の大量消費状況が述べられている。「ヨーロッパ文明の導入」によって重要産業に発達した工業では、たとえば綿織物業などの分野で「ヨーロッパや北米の製品と熾烈な競争をしながら、日本の製品は、すでに以前から世界の全市場に出回っていた」と指摘する。ただし、重要資源の鉄鉱石を欠いているため「中国や満州から輸入している」というが、これは戦前のものをそのまま引いているといえよう⁴⁷⁾。戦前にも一部見られた記述としては、イタリアとの貿易品目に関するものがある。イタリアから日本への輸出品として自動車が挙げられているのは、この時期の特徴である⁴⁸⁾。なお、「読み物」の項で「日本の地中海」(筆者不明)と題して、「リグーリア州のリヴィエーラ海岸のように、山々の斜面に段々畑がきちんと配列されている」瀬戸内海光景が具体的に紹介されている⁴⁹⁾。

1950年代に入ると、学校種(商業・農業学校用)によるためと思われるが、産業面での記述に比重を置いたものが散見される。経済活動を地域別に記述した中で、「日本は、欧米の手本を模倣する能力と、労働力の豊富さを利用する能力を利用しながら、今世紀初頭までに、本土、四国、九州の島々に大規模な工業の集中を実現した」と述べられている⁵⁰⁾。さらに、農業人口が約50%であることや漁業は世界第一位であること、珊瑚と真珠採取も行われていることなどを紹介した後、日本が

「アジアで唯一の商工業大国」になったのは、「日本人が、アジアでヨーロッパ工業国の教育を受け入れた最初」で「唯一の国であった」からであるとの指摘も見られる⁵¹⁾。ヨーロッパ文明の受容により工業化・近代化を達成したというのも、戦前から引き続く日本イメージである。そして、戦後の状況については次のような記述に遭遇する。

最近の戦争は、日本の全産業に大きな打撃を与えた。だが、今日ではそれは回復していて、すでにいくつかの部門では戦前の生産量に達したり、それを凌駕したりしている⁵²⁾。

具体的には、機械工業・繊維工業・化学工業などが主要工業として挙げられ、「効率的な商船隊」と「主な世界航空路線と見事に張り巡らされた鉄道網」などによって商業も「明確に復興」していることも記されている⁵³⁾。すでに戦前の鉱工業生産水準を回復し、「もはや『戦後』ではない」と『経済白書』も謳い上げた時期であることを反映した記述といえよう⁵⁴⁾。折しも、いわゆる高度経済成長期に入った日本の状況をよく示している記述としては、以下の例もあげておこう。

特に重要なのは、激しく聡明な住民の活動である。彼らは同じように熱心に農業、漁業、工業に専念している。世界の大都市のひとつ(人口800万人)である首都の東京の他に、大阪、京都、横浜、名古屋のように、実に数多くの大都市があり、猛烈な活動で燃え立っている。このことは、特に工業においてどの部門でも著しく発達したことに示されている⁵⁵⁾。[イタリックママ]

さらに、1960年代前半に教員養成学校用ならびに理科リチェ用教科書を見てみよう。同一著者によって著わされたため重複する部分が多いので、専ら前者によりながら後者の内容に触れることにしたい。

まず、日本に関する総括的記述を紹介しよう。

日本帝国は、完全に島から成っているため、その歴史において特異な連続性を示している。26世紀以上もまえから君臨してきた王朝は、—— その間に125人の天皇が次々に現れた —— 並ぶものなく世界で最も古い。ヨーロッパ文明の人々との関係は、二世紀の中絶の後、1854年に合衆国の圧力の下で再び開始された。そして1868年に天皇睦仁は、内戦の結果、主権を実際には篡奪していた将軍制度が廃止されたため、この国の西洋化を開始した。質素で勤勉で知的な日本人は、短時間で、その国民的性格を失うことなく、ヨーロッパ文明の技術的要素すべてを自分のものとするに成功し、日本を世界の大国、第一級の商工業大国にしたのである。第二次世界大戦では、日本の勝ち誇った軍隊がたった6か月の期間(1941-1942)だけフィリピン、インドネシア、ヴィエトナム、マレーシア、香港とシンガポールの要塞、ビルマ、そして数多くのオセアニアの島々を占領し、日本の絶頂を示したが、間もなく破局へと続いて行った。1945年9月2日に東京湾で結ばれた停戦協定で、本来のいわゆる日本群島に縮小したため、日本は一連の勝ち誇った戦争で過去15年間に手に入れた征服地すべても放棄しなければならなか

った。さらにサンフランシスコ講和条約（1951年）は、この状態を確定した。戦争によって破壊され、すでに人口過剰となった国に、1945年から1950年の間に旧植民地や他の国々から625万人余りが引き揚げてこなければならなかった、という事実もまた深刻であった⁵⁶⁾。[ゴシック・イタリックマ]

地形や気候、人口、面積、主要都市、産業などに関する叙述も豊富で詳細である。このうち、人口に関しては、次のような指摘が目を書く。「西洋文明と接触するようになってからの日本の人口の漸増——日本は移民を送り出す国で、移民を受け入れる国ではないので、増加はもっぱら自然増加であったに違いない——は、全く並外れている。」⁵⁷⁾戦後の人口増加と山がちな地形とを勘案すれば、人口密度は「大国の中では最も高い」と評し、1970年には人口1億人を上回るとであろうと予測している。一方で、「1952年に移民が再開されたが、それには非常に限られた数の個人しか関心を示さなかった」とも指摘している⁵⁸⁾。日本が如何に移民の出入りに関心がないか、を如実に表している。人種としては「モンゴル系」だが、北海道には「ヨーロッパ起源の、非常に独特な民族であるアイヌの末裔が生き残っている」[イタリックマ] ことにも触れている⁵⁹⁾。

政治制度に関しては、「世襲性の立憲君主制であること」[ゴシックマ]、「皇帝の権力は1947年の憲法によって明白に制限されているため、実際には、主権は人民に属し、選挙によって選ばれる国会——二つの院で構成されている——が国家権力の最高機関である」ことが述べられている⁶⁰⁾。主要都市を説明し

た中で注目されるのは、「戦争で用いられた最初の原子爆弾（1945年8月6日）によってもたらされた破壊から復興し、10年後にはすでに人口35万7276人を数えていた」という、広島についての記述であろう⁶¹⁾。戦後の復興と関わっては、「奇跡的でさえあるのが工業の発展である」として、日本が「世界の主要工業国の一つ」であり、具体的に重工業・軽工業の分野を列挙している⁶²⁾。そして、「輸出はほとんど工業製品」であり、「食料品と原料は輸入されている」ことを強調して、「人口過剰は、だがしかし日本が生存するためには、大規模に工業製品を生産して輸出するという絶対的必要性がある」ことを指摘している⁶³⁾。

同一著者になる理科リチェ用教科書では、内容はほぼ同一だが、「読み物」として、「古いものと新しいものとの間の日本」と題する一文が掲載されている⁶⁴⁾。そこでは、敗戦から15年も経たないうちに「日本はアメリカの生活様式を採り入れようと切望しているとの印象」を受けるとともに、東京を典型例とする「大都市の巨大化」と「世界最大で最も華やかな電飾広告」を有する東京の夜景などに言及されている。だが、その一方で、「近代的集合住宅と伝統的な家屋とを選ぶことができるならば、日本人は、ためらわずに、石で飾られた、小さな庭のある木と紙の家を好むだろう」とも断じている。

やはり理科リチェ用ならびに後期中等学校用の1963年版教科書も記述量が多く、具体的である。そこでも「日本人は、活動的で知的であり、西洋と接触して、すでに、近代的という意味で経済的、政治的、社会的な進歩の道を急速に進み終えている」との件があり⁶⁵⁾、さらに次のような具体的記述に連なっている。

日本の港がヨーロッパに再び開かれた時(1868年)以来、数十年の経過で、日本の人民は近代技術の進歩の道を非常に急ぎ足で歩んだ。そして、アジア・ラテンアメリカ・ヨーロッパの各市場をもめぐり、欧米の工業製品と十分競争できるほど、政治的にも経済的にも、あらゆる点で東洋では最強の国家となった⁶⁶⁾。

産業面での記述では、未耕地の多さ、仏教の影響で家畜飼育が増加しないこと、森林資源の豊かさ、などが詳述されている⁶⁷⁾。注目されるのはやはり工業に関する記述で、以下のように述べられている。

工業設備は、国内の金属加工業や機械工業から広範囲に供給されて、すばらしいものがある。日本には炭層がわずかしかないが、重要な銅山と亜鉛鉱、そして低廉で非常に活動的な、強力で大量な労働力、を自由にできる。……日本は、要するに主要な原料——特に綿花、鉄——を輸入し、とりわけ、生糸と繊維手工業製品一般、機械、造船、玩具、ゴム製品、磁器、を輸出している国である。アジアにおける日本の立場は、本当に、ヨーロッパにおいてイギリスが常に占めてきているそれに例えることができる。⁶⁸⁾ [ゴシック・イタリックマ]

労働集約的で、「非常に先進的な方法」で行われている農業でも「さまざまな部門で発展している」工業でも、アジア諸国の中で「日本は確かに最も進歩した国」であるという評価は、1964年に出された中学校用の教科書でも変わらない⁶⁹⁾。同書では、歴史に関する簡

単な記述もあり、大要次のように述べられている。「19世紀末以来、急速な近代化を体験し」た日本は、「第一等の工業大国になって、常に増加する人口に必要な空間を手に入れるために、日本は中国の征服という野心に満ちた計画を試みた。」だが、第二次世界大戦でアメリカに敗北したため「その企ては失敗した。」「最初の原子爆弾によって一瞬で壊滅された」広島・長崎に象徴される「甚大な損失」を被った日本だが、その「経済復興」は、「非常に急速だった。」⁷⁰⁾ さらに、「読み物」として収録されている「市場の征服を進める日本」では、戦後14年しか経たないにも拘わらず、「日本の工業力」は「多くの分野でドイツを凌駕し、合衆国のそれと比較しうる」に至るほど復興発展していることを述べ、「日本製品は、その低価格で世界中の市場を圧迫している」ことを伝えている⁷¹⁾。

——おわりに

本稿で扱った1920年代から1960年代前半までの限られた材料の中から、試論的なまとめを最後にしておこう。

まず、時期を問わずに経済関係の記述が豊富であることは見逃せない特色である。とりわけ顕著なのが、日本の近代化・工業化の速度に対する驚きである。そのような急速な近代化を達成した理由として挙げられているのが、しばしば中国と対比しながら指摘される日本のヨーロッパ文化の受容・模倣の迅速さである。特に戦前においては時期を問わずにこの点が強調されている。その上で、戦前ではソーシャル・ダンピングや低廉な労賃を指摘して、日本が綿織物業などを中心とした国際競争力を増大させている点を捉えている。

戦後になると、近代化・工業化の発展速度は、驚嘆の念を以て、復興の速さを通して具体的に語られる。日本のヨーロッパ文化の受容・模倣の迅速さという理由づけは基本的に変わらないが、労働力の豊富さと国民の活動性にも注目している。いずれにしても、瞬く間に欧米先進国に追いつき、それを凌駕せんばかりの競争力を日本がつけてきているという現実に着目も感じているといえよう。

資源のなさが大きな制約になっている点もほとんどの教科書が触れている。戦前においては、それが植民地獲得を正当化する理由として説明されるとともに、植民地からの資源収奪の構造要因として指摘されている。戦後になると、原料を輸入して工業製品を輸出するという加工貿易の必然性を説明するのに用いられている。具体的生産物については時期を問わずに、工業のみならず、農林水産業においても具体的に列挙されている。

人口の多さと人口密度の高さも時期を問わずに指摘されている。だが、戦前においてはそれらが短絡的に植民地獲得の正当化要因として語られ、戦後においては労働集約的農業や工業発展要因として捉えられている。イタリアは1950年代から1960年代前半にかけて高度経済成長期にあったが、当時のイタリアから見れば日本の工業における労働集約性が際立って映ったのかもしれない。

文化的側面への言及は必ずしも多くはないが、日本が文化的にも優れたものを持っているという評価は戦前からなされている。同時に、衣食住や生活習慣において、日本国民が伝統的生活様式を守っているという指摘は散見される。その意味では、ある種の伝統墨守ないし不変性、生活保守主義が国民性の特色

として捉えられているといってもよいだろう。もっとも、このことは本稿で取り扱った時期について当てはまるのであって、以後の変容をどう記述しているかは、今後検討したい。あえて推測すれば、1960年代前半までの日本社会——国民性や国民の精神構造などの心性的部分を含めて——の変容度は、それ以後と比べると、実はそれほど大きくなかったことを反映しているのかもしれない。

経済的側面への関心の大きさに比べると、政治制度への言及は簡潔である。常に、「立憲君主制」と二院制という点が述べられているだけともいえる。天皇をめぐるのは戦前と戦後で大きく異なる点は明白に述べられているが、「立憲君主制」という評価は共通している。議院内閣制を否定してファシズム政権が登場したイタリアからすれば、いかに形式的だけにせよ、戦前においても二院制であったことが目を引いた可能性があるだろう。

本文では目立たないが、「読み物」として付け加えられている材料には、自然の美しさが強調されているものが散見される。就中、瀬戸内海の美しさは近代日本を訪れた多くの欧米人が共通して指摘するところである⁷²⁾。イタリアからみれば地中海の地形との類比は当然想起されるところである。その意味でも、このような日本の自然の美しさは驚異でもあっただろう。

このように、さまざまな点において、驚異と脅威とが并存していたのが基本的な日本イメージといえるのではないだろうか。そのため、ある場面では羨望に、別の場面では警戒に、それぞれそのイメージから派生する副次的なイメージは異なっていくことになるであろう。

《注》

- 1) 2009年9月17日付 “la Repubblica”、第18面。
- 2) ドイツの教科書における日本イメージの変遷については、拙稿「ドイツの教科書にみる近代日本像の変遷」『敬愛大学国際研究』第6号、2000年11月、91 - 126頁、及び「ドイツの教科書に見る戦後日本像の変遷」『敬愛大学国際研究』第9号、2002年3月、1 - 39頁、を参照。
- 3) ドイツの場合、ブラウンシュヴァイクのGeorg Eckert InstitutならびにベルリンのBibliothek für Bildungsgeschichtliche Forschungが体系的な史料収集を行っている。また、主要都市にはSchulmuseum (学校博物館) が置かれている。たとえば、ハンブルクの学校博物館は、ナチズム期と第二帝政期の展示ならびに史料収集に注力している。
- 4) Agenzia Nazionale per lo Sviluppo dell'Autonomia Scolastica(ex INDIRE)公式HP : <http://www.indire.it/>。
- 5) ボルツァーノはかつてはドイツ語圏で、現在でも若者はイタリア語が主だが、中高年層はドイツ語の方がむしろ通じるくらいである。同博物館の概要ならびに主要展示資料に関しては、Museo della Scuola, Comune di Bolzano, 1997を、また、図版教材の解説とそれを用いた授業の説明などに関しては、Tabelloni didattica, Città di Bolzano, Ufficio Beni Culturali, 2001を参照。
- 6) 2009年9月に筆者が訪問した際には、展示資料だけでなく、教科書を含む未整理資料全般を閲覧する機会に恵まれた。だが、管見の限りでは、小学校のイタリア語教科書ならびにドイツ語の教科書が多く、本稿の対象となるものは見あたらなかった。
- 7) Marcello Dei, *La scuola in Italia*, Società editrice il Mulino: Bologna, 1997. 3° edizione aggiornata 2007, p.7.
- 8) *Ibid.*, p.17. 学校種については便宜的に表示しているが、正確に表記するとすれば、「中学校」は「下級中等学校」(Scuola media inferiore = Scuola secondaria inferiore)であり、「高等学校」は「上級中等学校」(Scuola media superiore = Scuola secondaria superiore) というべきである。
- 9) *Ibid.*, pp.80 - 81.
- 10) *Ibid.*, pp.21 - 27.
- 11) *Ibid.*, p.81.
- 12) Marzio Barbagli, *Educating for Unemployment: Politics, Labor Markets, and the School System - Italy, 1859-1973*, translated by Robert H. Ross, New York, Columbia University Press, 1982, pp. 13 - 14.
- 13) 日本では、「愛の学校」などという副題が勝手に添えられるように、情緒的に捉えられがちな『クオーレ』も、19世紀後半のイタリアの多様性と求心化を図ろうとする教育状況とを物語るものと見ることができる (エドモンド・デ・アミーチス著和田忠彦訳『クオーレ』平凡社 (平凡社ライブラリー版)、2007年)。
- 14) たとえば、イタリア共和国憲法 (1947年12月27日制定) でも、「芸術および科学は自由であり、その教授も自由である。共和国は、教育に関する一般的規律を定め、すべての種類および程度の国立学校を設ける」(第33条)とある一方、「州は、この憲法の定める原理にしたがい、固有の権力と権能とを有する自治体とする」(第115条)と規定されている (宮沢俊義編『世界憲法集 第4版』岩波書店、1983年、116頁、138頁)。
- 15) Sebastiano Crinò, *La Geografia nelle Scuole Normali, Vol. III: Paesi Extraeuropei*, Milano: L. Trevisini-Editore, 1920, p.75. 同書には、写真が5葉収められている他、「日本の経済的将来」と「昔とヨーロッパの影響後の日本女性の教育」の日本人の著作からの翻訳二編が、「読み物」として掲載されている。
- 16) *Ibid.*, p.76.
- 17) *Ibid.*
- 18) *Ibid.*, pp.76 - 77.
- 19) *Ibid.*, p.77.
- 20) *Ibid.*
- 21) *Ibid.*, p.80.
- 22) Pietro Del-Zanna, *Geografia e Geologia per le Scuole Medie Superiori*, Palermo: Casa Editrice Remo Sandron, N.D., p.353.
- 23) *Ibid.*, p.353 - 354.
- 24) Carmelo Colamonico, *Corso di Geografia ad uso delle Scuole Medie Superiori, Vol.III, L'Europa. Le*

- Altre Parti del Mondo*, Milano: Dottor Francesco Vallardi, 1924, p.116.
- 25) G. Carenzi & S. Pastorini, *Testo di Geografia per le Scuole Secondarie di Avviamento al Lavoro, Vol.II, Per La Seconda Classe, L'Italia e le Colonie Italiane I Continenti Extraeuropei*, Milano: Edizioni "La Prora", 1931, p.137.
- 26) Piero Gribaudi, *Geografia dei Prodotti e delle Comunicazioni, ad uso del IV corso degli Istituti tecnici superiori*, Torino: Società Editrice Internazionale, PartII, 1938, p.164.
- 27) *Ibid.*, p.244 - 245.
- 28) *Ibid.*, p.272.
- 29) Juri Meda, "Venti d'amicizia. Il disegno infantile giapponese nell'Italia fascista (1937-1943)", in: 《Memoria e Ricerca》, n.22, maggio-agosto 2006, p.139.
- 30) *Ibid.*, p.158.
- 31) Tarchini Enrico, *Giappone*, Istituto Technico-Commerciale- Schiaparelli. 手書きだが、A4版の方眼罫紙にダブルスペースで記載され、全105頁になる。なお、エンリコは下級中等課程の4年生であった。
- 32) Eugenio Oberti & Arturo Avelardi, *Il Nostro Mondo, Testo di Geografia e Letture Geografiche ad Uso degli Istituti Tecnici Inferiori*, Vol.IV, Terre e Genti d'oltre Europa, Torino: G.B.Paravia & C., 1939, p.18. なお、本書には、いずれもイタリア人の手になる「5000の島の帝国」「富士山」「東京」「芸術、科学と日本の自然」という4本の「読み物」が掲載されている。
- 33) *Ibid.*, p.18 - 20.
- 34) *Ibid.*, p.20.
- 35) *Ibid.*, p.20 - 21.
- 36) Piero Landini & Pasquale Piepoli, *Corso di Scienze Naturale e Geografia per i Licei e gli Istituti Magistrali Geografia Generale e Geologia*, Roma: Editrice Perrella, 1940, p.213.
- 37) *Ibid.*, p.213.
- 38) *Ibid.*, p.228.
- 39) Luigi Giannitrapani & A. Somazzi, *Il Mondo d'Oggi, Testo di Geografia per la Scuola Tecnica Professionale*, Catanzaro: Guido Mauro-Editore, 1943, p.138.
- 40) *Ibid.*, p.138.
- 41) Piero Gribaudi, *Uno sguardo al mondo Geografia e letture geografiche per le scuole di avviamento professionale a tipo industriale, Vol.I Geografia generale - I paesi del mondo*, Torino: Società Editrice Internazionale, 1947, pp.78 - 79.
- 42) Ernesto Ruggeri ed Orazio Locatelli, *Geografia per le Scuole Medie Vol.IV, I Continenti Extraeuropei*, Milano: Edizioni "La Prora", 1949, p.45.
- 43) *Ibid.*, p.48.
- 44) *Ibid.*, p.47.
- 45) 1960年代に入っても、事実関係に関する誤記はなくなっていない。たとえば、1960年の商業学校用教科書の日本の政治制度についての記述には、「その頂点に天皇がある君主制で、天皇の権力は二つの院と議会とによって行使される」とある（G. Assereto & I. Zaina, *Popoli e paesi Corso di geografia per le scuole di avviamento commerciale, Vol.II*, Brescia: La Scuola, 1960, p.168）。戦前の記述をそのまま引き写しているのは明らかである。また、いちいち指摘はしていないが、写真についても誤りは散見される。1960年版の教科書では高松・栗林公園の写真が掲載されているが（*Ibid.*, p.169.）、戦後間もないものと同じ写真を使用しながら「風情のある日本の田舎の一角」として紹介されていたりする（Ernesto Ruggeri ed Orazio Locatelli, *op.cit.*, p.46.）。
- 46) Ernesto Ruggeri ed Orazio Locatelli, *op.cit.*, p.48.
- 47) *Ibid.*, pp.48 - 50.
- 48) *Ibid.*, p.51. イタリアからの輸出品としては他に毛織物・人絹が、また日本からの輸入品としては絹織物・陶器・茶・磁器が挙げられている。1950年から1962年にかけてイタリアの国民総生産は2倍になった。特に輸出増大部門が最も急速に発展したが、その一例が自動車工業で、フィアットは1950～1961年で生産は4倍に拡大した（森岡鉄郎・重岡保郎『世界現代史22 イタリア現代史』山川出版社、1977年、291 - 293頁）。
- 49) *Ibid.*, p.51 - 52. なお、他書でも「読み物」として、「ノルウェーの海岸、イタリアの空のもと、マレーシアの色とりどりで繁茂した草木」を合わせたような「日本の瀬戸内海の美しさ」は取り上げられている（Antonio Basso, *Geografia per*

- la seconda classe dell'Istituto magistrale*, Milano: Garzanti, 1961, p.132.)。
- 50) Roberto Pracchi, *Noi e la Terra Corso di geografia per le scuole di avviamento commerciale e agrario*, Vol.II, Milano: Edizioni Scolastiche Mondadori, 1958, p.154.
- 51) Giovanni Bonacci, *Mondo nuovo Corso di geografia per le scuole di avviamento commerciale, agrario e industriale femminile*, Vol.II, Italia - Paesi extraeuropei, Milano: Fratelli Fabbri Editori, 1959, p.225.
- 52) *Ibid.*
- 53) *Ibid.*
- 54) 経済企画庁編『昭和31年度経済白書——日本経済の自立と近代化——』至誠堂、1957年、42頁。
- 55) Roberto Pracchi, *Noi e la terra Corso di geografia per le scuole di avviamento commerciale e agrario*, Vol.II, *L'Italia - I Paesi Extra-Europei*, Milano: Edizioni Scolastiche Mondadori, 1960, pp.150 - 151.
- 56) Antonio Basso, *Geografia per la seconda classe dell'Istituto magistrale*, Milano: Garzanti, 1961, p.120.
- 57) *Ibid.*, p.122.
- 58) *Ibid.*, pp.122 - 123.
- 59) *Ibid.*, p.123.
- 60) *Ibid.*, p.122.
- 61) *Ibid.*, p.124.なお、原爆ドームとそれに隣接して「信者たちが建てた」「広島大仏仮奉安殿」の写真も掲載されている (*Ibid.*, p.125.)。
- 62) *Ibid.*, pp.126 - 127.
- 63) *Ibid.*, p.127.
- 64) Antonio Basso, *Compendio di geografia dei paesi extra-europei per la I classe del Liceo scientifico*, Milano: Garzanti, 1961, p.88. なお、この文章は1959年3月15日付『Nuovo Corriere della Sera』からの引用である。
- 65) Bruno Parisi, *Continenti extraeuropei Corso di geografia per i ginnasi e per la I classe del Liceo scientifico*, Bergamo: Minerva Italica, 1963, p.68.
- 66) *Ibid.*, p.71.
- 67) *Ibid.*, p.72 - 73.
- 68) *Ibid.*, p.73.
- 69) Alessandro K. Vlora, a cura dei O. Agostini & P. Castellini, *Il nuovo cielo terra genti Corso di geografia per la Scuola Media Statale*, Vol.III, Firenze: Bemporad-Marzocco, 1964, pp.73 - 74.
- 70) *Ibid.*, p.74.
- 71) *Ibid.*, p.78. この文章は、1959年12月17日付『La Nazione』からの引用である。同じく収録されているのが「茶の儀式」(A. Mécs, *Il Giappone qual'è*, (『日本て何』)からの引用)である。「最も典型的に日本的なもの」は「日本人の生活を要約している茶の儀式である」として、「教養のある日本人の家は、『茶の湯』 [=茶室] を備えていなければならない」として、茶室の造りやその素材の高価さ、また点前の様子についてもかなり詳しく記述している (*Ibid.*, p.79)。
- 72) その一例として、Egon Kunhardt, *Wanderjahre eines Jungen Hamburger Kaufmannes - eine Reise um die Erde in 777 Tagen* (『若きハンブルク商人の歴訪の日々——777日間の世界周遊』), Berlin, Verlag von Dietrich Reimer, 1898, S.160 - 164 (拙訳「若きハンブルク商人が見た明治期の日本——エゴン・クンハルトと『歴訪の日々』」(その4)、『和光大学人間関係学部紀要』第11号第1分冊、2007年3月、57 - 60頁)、を参照。